

所属	生涯福祉研究科 生涯福祉専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	小山 陽香	指導教員 (主査)	西澤 利朗

論文題目	地域における精神保健福祉士のグループワーク実践研究 ー実践において「気にとめていること」からグループワークの重要性を考えるー
------	---

## 本文概要

### I 研究目的

グループワークが十分に機能することは、精神障害を抱える当事者が彼らの病や障害からくる様々な困難や苦しさ、もどかしさを抱えながらも、仲間との支え合い通し、自分なりに病や障害を受け入れ、主体的に生活を送り、ありのままの自分らしい生活に満足できるようになることである。そして、グループ活動は「生活を再構成」すること、「自尊心や人間としての権利が失われない生活」を送ることを、主体的に考えて行動していく基盤になると考える。しかし、先行研究によるとその実践における知識や技能などの理論が十分に体系化されていないといわれている。本論文では、地域のグループワーク実践における精神保健福祉士の役割や意識していることをたずね、精神保健福祉士の視点がどのようにグループワーク実践に根付いているのかを整理する。ソーシャルワークの援助技術といわれるグループワークについて、今一度、その意義を振り返り精神保健福祉士が目指すべき実践のあり方を考える。

### II 研究方法

障害者総合支援法上に規定された事業所に勤務する精神保健福祉士 3 名を対象とし、半構造化面接を実施した。分析は KJ 法を参考に行った。①データを、全体の意味内容が理解できるまで熟読する、②インタビュー内容に関連する記述部分を抜き出す、③②を読み返し、対象の表現にできる限り忠実に、簡潔な表現にまとめる、④全対象の③を集め、内容の類似するものをまとめ表題をつけ、これ以上まとまらない段階まで作業を繰り返す、⑤最終的についた表題をカテゴリーとする。この手順に沿って分析を行った。

### III 結果

①グループの枠組み、②グループのあり方、③ワーカーの役割、④ワーカーの実感、⑤精神保健福祉士の視点と他職種の見点の 5 個のカテゴリーを得た。本研究では対象が 3 名に限定されているが、ワーカーは、グループの中で起こることや利用者の言動によるメッセージを受け止め、利用者同士の助け合いや支え合い、仲間意識といったグループの力を実感しながら、それぞれの事業所の特色のなかで、ときには手探りの状態もありながら、目の前の利用者と向き合いグループを作り上げていることが明らかになった。

### IV まとめと考察

精神保健福祉士がグループワーク実践において気にとめていることは、①グループで話すこと、集団で活動することの重要性、②仲間・つながり・参加を大切に、安心感を保障し、メンバーが主体的に活動することの重要性、③グループワーカーは、メンバーやワーカー自身の成長・変化を通して、そのかわり方を意識して実践している、ということが明らかになった。地域では、グループワーク実践における援助過程に沿ってグループを展開するというよりは、雰囲気や参加のしやすさに重きを置きつつ、相互作用モデルで重要といわれている「相互援助システム」を、仲間同士の助け合いや支え合いを通して活用しようと実践していることが明らかになった。今後の課題の 1 つとして、グループワークという言葉の使われ方の多様さ、実践分野が多岐に渡りアプローチも様々であることなど、その多様性を踏まえてグループワーク実践のあり方を整理していく必要があると考える。